特42
456

訂正
觀世流謠外編番

經政

8

特42
117

經政

日記

昌くハ仁和寺御室より仕へそ[illegible]と

[illegible]都行幸[illegible]時[illegible]家ハ一門但

[illegible]寺經政ハ[illegible]臺形の時の行君御

寵[illegible]の[illegible]寺ハ[illegible]と慶西海

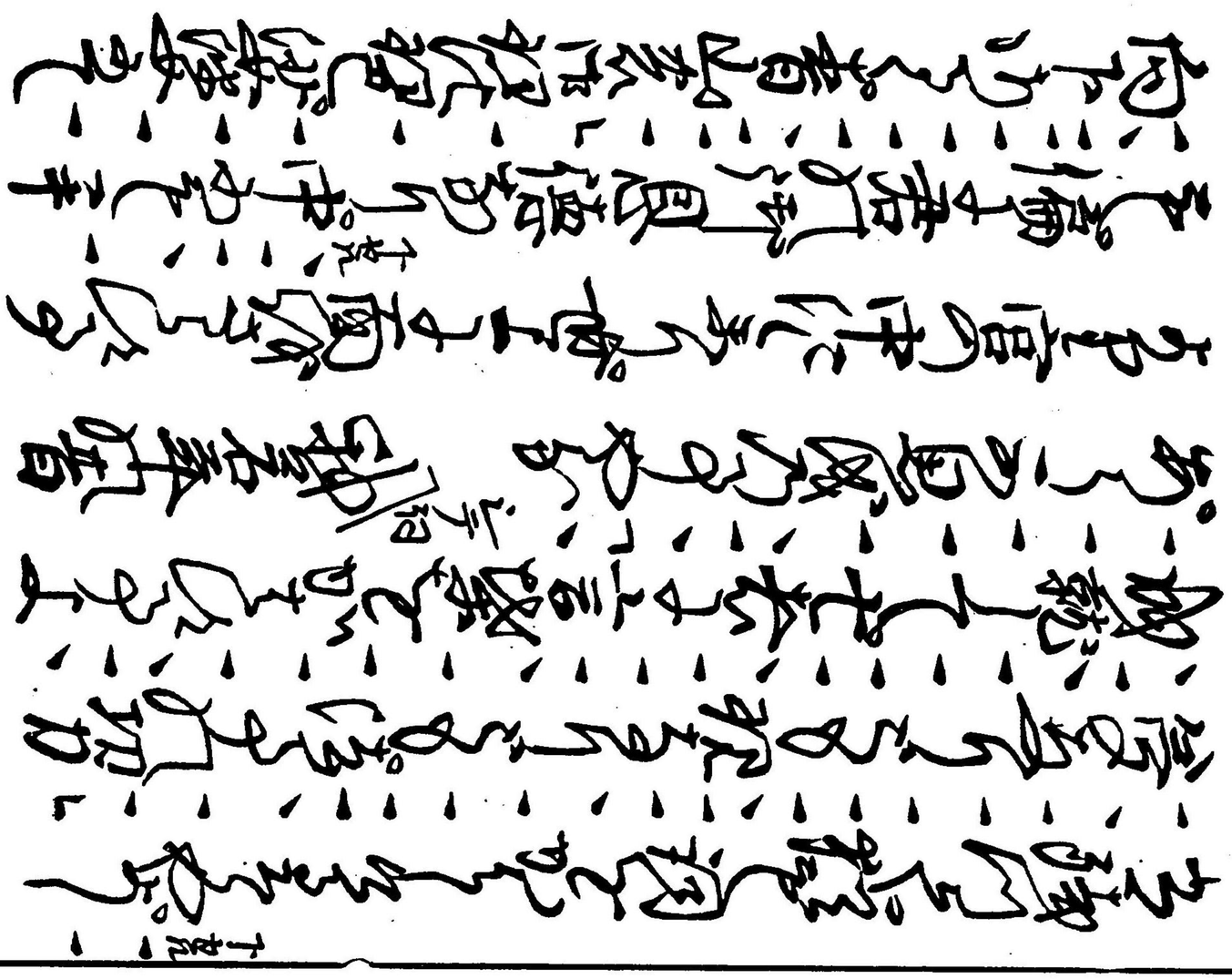
乃合戦[illegible]ハ行てハ[illegible]者ハ[illegible]と

此[illegible]ハ經政[illegible]日ハ時の預[illegible]

けまてん彼の琵琶を仏前にすへ置
管絃講にて弔ひ申せとの事にて
伶人役者を集めゝ　実や一樹の陰
にやどり一河の流れを汲むも皆是
他生の縁ぞかしましてや多年値遇
遇めぐみもふかくかなしみもかゝりける
くもゐ宮中にて法事をなしてよもすがら

うき経正の経政成正覚と弔ふ者
殊さよ　こゝに又彼青山と云琵琶をだく
亡者の為に手向つゝ同じく糸竹の声
も仏事をなすとかや日夜の法花
門我賊の道にあまねくや　かと
枯木もその花咲天乃雨月年をて
てらすをば夏の夜の霜のおきめぐるやと

かくて彼より見え給ふ者は陰露乃身
あらはれきし乃うらみ安観の縁はけなりける
なき 「ワキセル不思議やなさや深更よみなお
まよふる所に幽かなる影のりかけ
一人の影のあるやう有さのていて余(?)
いかなる人にてましますそ 「シテ我経政の
幽霊なるか御弔ひの有難さにそれ
あらはれ来りたると 「ワキセルいふこゑ経政の
幽霊と名のるかたちはさだかに見えず
猶ともかくもあらてあくて 「シテ声はかり名にて
絶のゐて 「ワキまたありつる人か
けの 「シテあるかとみれは 「ワキ又見えてうせて
「シテ永(?)うるり 「ワキなすさうた 「シテ蜻蛉乃ありかは
乃常なきさへこそ経政の影との



乃汗ゆるされを蒙り常人を動しうる
外絃より高く今をしひあく心を入ぶ
仮名を撥をとりて手をかりくぬる
表指はうつきしかの経政ぶく
ぶるの年乃昔よりかよい仁義礼
智信の道常をもちぶくぶよう
風月詩歌管絃もて尊とくぶ

村陰乃月露水乃あらはせの心をも
形をもしく　七者の為よ
行ふも必要なるて手初め青山
琵琶ぶくの楽器を調へ糸作
乃手向をも色へ　亡者を立て灯
明の光ぶよりなるあるぶ内乃
琵琶をもつまぶ　時をこそ

長生樂。祝ひ奉りて。長命の

きや時を知る。宮かうの雲り。俄に降られ

雨乃ちと　キリ　去りに。なまを携へて

附のてくしていう。いや雨まで

ちかりけり。ありきに降をよ雲の

上方に

月よりひの星。雲れ行の風。吹落

て。村雨乃ちと。ヤア　村雨乃ちと。ヤア　ありろや

ありろや。ヤア　村雨乃ちと。ヤア　絃ばかりくどして。ヤア　村

雨乃ちと。ヤア　梅が絃ちをかくとく

さめとと。ヤア　色、ヤア　笛一寸二乃

絃。ヤア　蒙として。ヤア　秋の風。ヤア　ぞ吹て

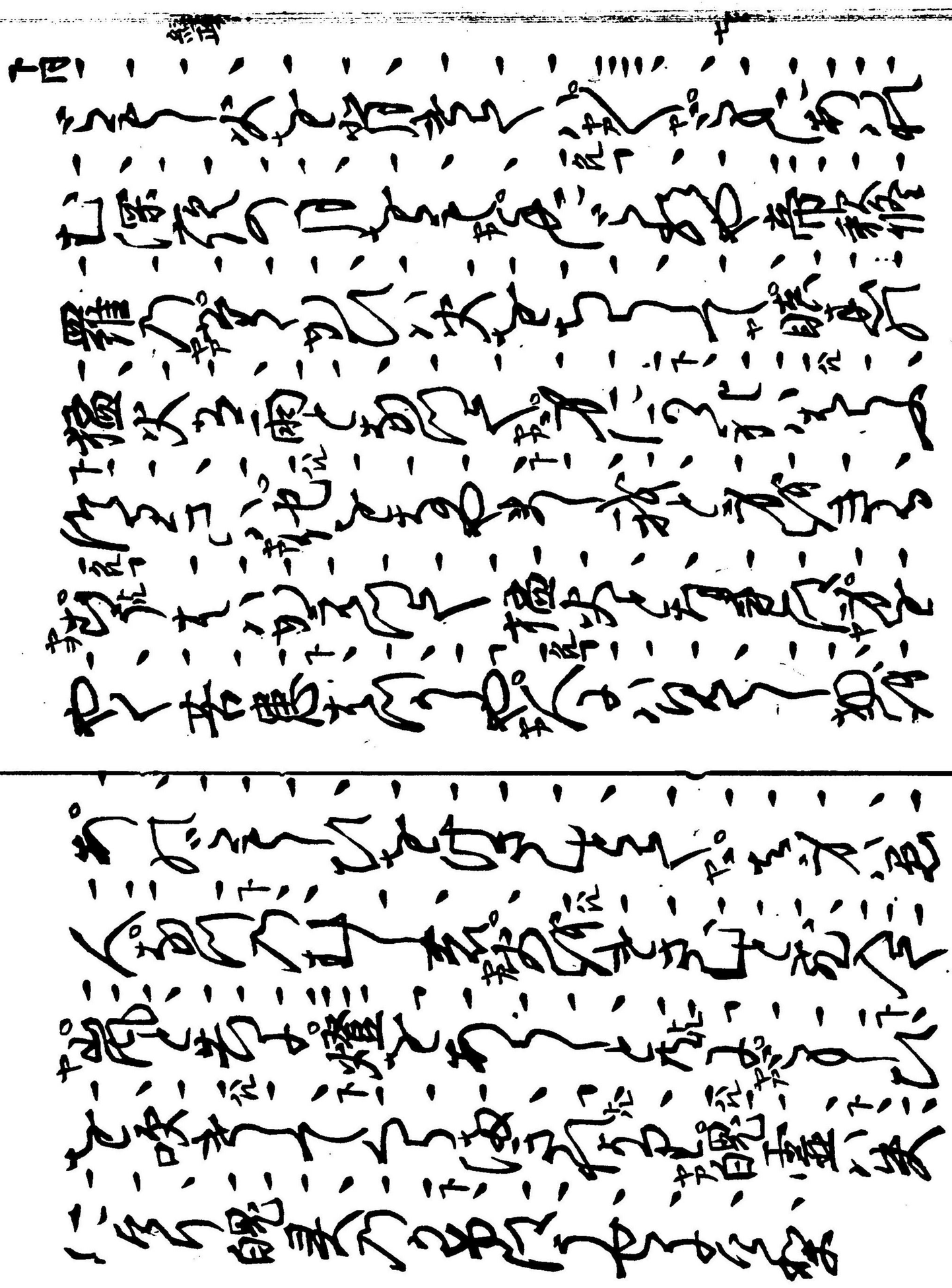
蹴鞠。ヤア　笛三寸四乃絃ち吟とて

てうちの鶴。ヤア　ぞ。ヤア　ぞ。ヤア　籠乃中

ちなく。ヤア　美。ヤア　心して。長命乃ちと

かくめよ一声乃鳳管ハ秋秦嶺乃
雲をうごかせバ鳳凰も是にめでて桐
竹よりくだりてはきすつゝ翔らく
舞あそへ律呂乃声々にこゝろ声聲
よきに弄あやをなすをもむき
をみる舞乃そて夜笠山も迎ふを
きゝこゝろ夜遊やめつらしき乃

夜遊やめつらしき乃夜遊座敷
あら名残をしやたまく偏字乃夜半
よかりしありつる折節よかりし
瞋恚乃せめなりぬるかや ありさま
作る人影乃ほあさま ハ経政か
恥かしや我姿やたけりたなけり
あやの乃こゝまひてきる人かくよ



右之本者觀世太夫織部以章句
眞本令版行畢

天保十一庚子歲孟春改正再板
皇都二条通御幸町西江入町旧
山本長兵衛

明治廿六年二月十七日印刷
明治廿六年二月同日訂正出版
明治廿六年三月廿九日別製本御届

定價三錢五厘

板權所有

訂正者　東京市麹町區飯田町四丁目壱番地
宮内省御用達
觀世清廉
發行者　京都市上京區二条通御幸町西入
檜常之助
印刷者